
異世界放浪者

マシュー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界放浪者

【コード】

N9019N

【作者名】

マシュー

【あらすじ】

この世から遠く離れた異世界に、迷い込んだ者がいた。

これからどうやって生きてゆくのか。 奴等 とは何なのか……。

走る者

レンガ作りの建物が無機質な輝きを放ちながら無言で建ち並ぶなか、息を切らして走る影があつた。

額から首筋へと流れ落ちる汗を振り払い、ひとり夜中の静寂をかき乱すその影は、その街の中心部の広場で足を止めた。

広場の街灯が小さな影をうす明るく照らし出した。

まだあどけなさの残る少女である。

異国風の服装の少女は、この街、いや、この国には不自然な存在であつた。

その少女は来た道を振り返るなり、その小さな体からはおおよそ想像もつかない大きな声で叫んだ。

「やっと抜けさせた、もう戻らぬからのう、わらわは自由じゃ」

だいぶ長い距離を走つたというのに、体の内側からエネルギーが湧いてきて、少女はひとり夢中になって広場を走り回つた。

しばらく走り回り、そろそろ疲れてきた少女は、広場の中央にある噴水の前で足を止めた。

「これは、何じゃ」

池か。

いや、城の庭にあつた池はこのように水が湧き出したりしなかつた。手を入れてみる。冷たい。

確かに水のようにだ。

両手でそつとすくってみる。揺れる水面に少女の顔が映っていた。

「滝の池じゃ」

叫ぶなり少女は水しぶきをあげて噴水に飛び込んだ。走り疲れて火照った体に水の冷たさが心地よい。

しばらく我を忘れて遊んだ。水をばしゃばしゃと四方八方に撒き散らしたり、泳いでみたり。

そこへ近づくとふたつの影。

「おやおや、はしたない女の子がいたものだね」

ふたつの人影

どこからか聞こえてきた声に、少女は驚き、足を滑らせ転んでしまった。

「大丈夫か、おい」

口の中に流れ込んできた水を吐き出し、むせながら顔をあげると、少女を見下ろすふたつの大きな人影があった。

うす明るい街灯の逆光で顔はよく見えないが、ひとりには腰まで髪を伸ばしていて、もうひとりは法衣を羽織っているのがぼんやりと分かった。

「…お主等は誰じゃ」

恥ずかしいところを見られたものだ。

少女は立ち上がって言った。

「僕は…そうだね、放浪者だよ」

「ほづろっ…じゃ？」

初めて聞いた言葉を口で唱えてみた。

「なんだってこんなガキがこんな時間にこんなところをづろづろしてんだ？」

法衣を羽織った男が言う。

「ガ、ガキじゃと」

少女は聞き捨てならない言葉を発した男に水をばしゃばしゃとかけた。

「うわ、冷たっ」

飛び退いた男を見てくすくすと笑いながら、髪の毛の長い放浪者が言った。

「キミはどこから来たの」

中性的な顔立ちをしているが、細い喉元や手首、透き通った声から女性と分かる。

「わらわは… センゴク から来た。城を抜け出して来たのじゃ」

「センゴクねえ…」

少女に水をかけられてびしょ濡れになった法衣をため息混じりに手で叩きながら男が言った。

「まずいな」

「何が不味いのじゃ。飯か」

「そういう意味じゃねえよ、あータバコが湿気っちまった」

くわえていたタバコにライターで火を点けようとするがなかなか点かない。

その様子を少女はじっと見ていたが、おもむろに手を差し出した。

「それは何ぞよ」

「あ、あぶねえ。これは火だ」

「火…」

蠟燭の先に灯るあれか。

だがあれは確か、火薬が塗られた木の棒を擦って火を出していたはず。

しかしこの男は一瞬にして火を出した。奇術師か何かなのだろうか。

「キャシー、この生き物はお前のツレか」

少女を顎で差し男が言う。キャシーと呼ばれた女性は静かに微笑み言った。

「まさか」

「な、何じゃと、わらわを生物扱いしおって」

また少女に水をかけられ、男は心底嫌そうな顔で言った。

「だーもうおめえは…おいキャシー、コレどうにかしろよ」

「ついにモノ扱いか」

言い争うふたりを、キャシーと言われた女性は、顎に指を当てて何か考えながら眺めていたが、やがて低い声で言った。

「…範次郎、ちょっと」

少女に聞こえないよう、声を潜めて言う。

「相当まずいよ、これは」

「そつだな…、ああ、やつとついた」

湿気ったタバコを不味そうに吸い、範次郎は言った。

「まア…なにせよあれひとりじゃすぐにやられちまうだろう」

うらめしそうな目で自分を睨む少女を目で差して言った。

「 奴等 に？」

「 奴等 にだ」

範次郎はそう言つと、ふう、とタバコの煙を吐き出した。
それをキャシーは心底嫌そうに見て、言った。

「仮にも聖職者の君が、タバコなど吸っていいのかい？」

「あ？ダメに決まってるだろ」

間髪入れずに答え、タバコの火を地面に広がる水溜まりで消した。

「ダメだからつめえんだよ。」

にやりと意地悪く微笑む範次郎をキャシーは心底嫌そうな顔で見た。

「へええ…世俗にまみれた聖職者もいたものだね」

聞こえないふりをした範次郎は、噴水のレンガの縁に腰かける、頭のとっぺんから爪先までびしょ濡れの少女へと向き直った。

「お前さんは何歳だ。名前は？」

「13歳じゃ。名前はねぎ子。お城ではねぎ子姫と呼ばれておつてのう、わらわはそれが嫌で嫌で…」

「13歳か。ガキで充分だな」

懐から新しいタバコを取り出しながら範次郎が言った。

「お、お主はっ」

声を荒げるねぎ子を制止するようにキャシーが言った。

「まあまあ…。ねぎ子ちゃんは、ここがどこか、自分がどんな状況に置かれているか知りたいかい？」

少女はキャシーの質問には答えずに、

「そういえばさっき何についてまずいと言っておつたのじゃ、奴等とは何じゃ」

「聞いてたんだね…」

キャシーはため息をつき、範次郎は頭をがしがしとかいた。

「いいか、お前さんに話しておかにならんことがいくつがある。ちゃんと聞けよ」

ねぎ子にずいと近寄り言った。

「お主、よく見たらなかなかの色男じゃのう。わらわの伴侶にしてやってもいいぞよ」

「残念。俺ア既婚者だ」

肩をすくめそう言うてから、こりゃまともに話ができそうにないなと範次郎は思った。

「な、なんじゃと、…まあ、よくもお主と生涯を共にしようという物好きがおったものじゃのう」

「全くなア…」

範次郎は、キャシーが苦虫を噛み潰したような顔をしているのを見て、激しく後悔した。

「まア、そんなことはいいんだ」

キャシーの静かな声に、今度は範次郎が慌てる番だった。

「いいかい、ねぎ子ちゃん。君に理解してもらわなきゃならないことが…そうだね、みつつある」

指を3本立て、そのうちの1本を折ってからキャシーは言った。

「ひとつは、ここが異世界であるということ。 神隠しの隠し場所
とでも言おうか。」

範次郎のように、元々この世界の生まれの人もあるし、僕のように
外側、君がいた世界から来た者もいる」

「神隠し…？帰れないの？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9019n/>

異世界放浪者

2010年10月11日01時43分発行